



2007年度 札幌地区使徒職大会が開催されました



2007年10月7日（日） 藤学園講堂

「ペトロ岐部と187殉教者」の列福は、日本のカトリック教会にとって大きな意義をもつとともに、信徒個々に対しても、教会の歴史や礎について深く考え、信仰生活のあり方を問いかける契機となっています。

このことから、今年度の使徒職大会はテーマを『殉教者を想い、ともに祈る』—ペトロ岐部と187殉教者の列福に向けて—とし、わが国の殉教の歴史に造詣の深いデ・ルカ・レンゾ神父から、「殉教者と私たちの信仰」と題した講演をいただき、その後、地主司教司式の殉教者ミサを捧げ日程を終えました。

今年の当番教会は真駒内教会で、準備や当日の運営にご尽力いただきました。また、例年通り侍者会は前日から1泊研修を行い準備しました。当番教会以外にも、各小教区から典礼奉仕、聖歌隊、スカウトによる駐車場整理、各教会学校からの絵画の展示など多くの人の力により大会が運営されました。

「殉教者と私たちの信仰」 日本の教会における188殉教者の意義

はじめに

188名の列福は日本の教会にとって大きな意義がありますが、日本の殉教者はこれだけではなく1万人以上いました。多くの方は名前、日時、場所の記録が残っていません。私たちは彼らの名前を知りません。神様だけが知っています。名前も知らない多くの殉教者が私たちの教会を支えていることを覚えておかなければなりません。聖徒の交わりとして、彼らは私たちのために祈っています。私たちもいつか、この人たちの顔を見る日がきます。そのことを期待して参りましょう。



日本二十六聖人記念館館長
デ・ルカ・レンゾ神父

教会には成長するプロセスがあります。人間の成長には、最初は親に依存し、その後自分で考え行動し、自立するまでのプロセスがあります。教会も同じで、最初は外国の宣教師に依存し、成長して自立する時間的な流れがあります。日本の教会は、迫害により外国の教会と切り離されて自立しなければならなくなりました。迫害時代の日本の教会をみると完全に自立した教会だったことがわかります。宣教から50年くらいで一人前になったということは驚くべき成長率です。

188名の殉教者の物語は、日本の教会が依存する時代から自立する時代に完全に変わったことの証しです。



子どもたちの作品

188名殉教者の特徴

今回列福される188名は当時の日本の教会を代表するグループといえます。また、外国人宣教師が一人もいない、聖職者も少ない、目立つのは子供・女性です。これは、当時の教会の状況を反映して信徒の代表的な人物を選定しているということで、過去の日本の列福運動にみられる修道会・宣教会中心のものとは対照的となっています。

また、特徴的なこととして家族単位の殉教が多いことがあります。家族中心の信仰の姿・信仰による家族の一致は、家族関係がバラバラになっている現代社会に生きる私たちに大きな問いかけをしています。

この人達は、ただ捕まって殺されて殉教者になったのではありません。迫害の時代にあって神様にのみ希望をおいた生き方の結果として殉教があったのです。

彼らは例外なく喜んで最後の瞬間を迎えています。普通なら絶望的な状況の中で、そんな余裕があるはずがありません。しかし、彼らにはその余裕がありました。もちろん人間的なものではなく神様からの恵みです。しかも、188名全員に例外なく与えられています。それは、神様は何があっても私たちを守ってくださるという確信です。

迫害のない現代社会に生きる私たちは、そういう気持ちが弱くなってきているのではないのでしょうか。現代の医療や科学に頼りすぎて、人間の基本的なあるべき姿を見失っているのではないのでしょうか。殉教者の物語にふれると、そう思えて仕方がありません。

迫害時代に育てられ、生きた人々

188名のほとんどは迫害時代に洗礼を受けています。迫害を受けることを知りつつあえてキリスト者になっています。これまでの殉教者とは違う側面があります。真の救いへ向けて、あえてこの道を通ることを選んでいます。

また、真にキリストの道を歩んだ彼らは、迫害に対して敵をゆるすことで応えました。数万の人々が弾圧され、殺されていくのに報復はほとんどありませんでした。島原の乱くらいです。あのような反乱が各地で起き



ていたならば社会は大混乱に陥っていたはずです。「敵をゆるす」ということは、当時の日本では革命的なことです。

「仇討ち」や「弔い合戦」が常識だった社会で、キリストの教えが共同体として生きていたということです。現代社会は、このような感覚を失っています。悪いことをした者は罰せられるべきと考えます。また、報復も正当化されます。私たちはこの時代から何も学んでいないことがわかります。

徳川時代に入ると、迫害の目的は信徒の抹殺から棄教に移りました。表面的に棄教を装えば命は助かったし、普段

通り生活できました。しかし、彼らは信仰を最後まで守る道を選びました。自分の信仰を証して生きることにこだわったのです。

「信仰は心の問題だから心で信じていれば教会にいかなくてもいい。」と言う人がいるかもしれません。しかし、決してそうではないと殉教者は訴えます。

彼らの姿をみて「とてもついて行けない。」と思うかもしれません。しかし、彼らの犠牲のうえに今の教会があることを忘れてはなりません。信仰に生きた彼らを想い、誠実に信仰生活を送ることが現代を生きる私たちに求められていることです。

今年も晴天の国際デー！

9月23日（日）、青空の下、国際デーが行われました。年一回の、このお祭りは北海道に住んでいる外国人同士、そして外国人と日本人の交流の場として、そこで出会った人々がそれぞれの文化を楽しみ、互いに繋がりを持っていくことを目的としています。

ミサの中で司教様は「教会は、その始まり（ペンテコステ）からインターナショナルでした」と話されました。言葉や民族・国・文化を超えて、友情を深める機会になったと感じます。主催の「うえるかむはうす」でお手伝いしている石田さんと、国際デーのボランティア、天使大学の石田春菜さん（偶然どちらも石田さんでした！）にお話を伺いました。



国家公務員で全国を異動している石田と申します。今年の4月大阪から札幌に転勤してきました。国際交流や国際協力活動に少なからぬ興味を持っていて、20年近く転勤先々でさまざまな活動に参加させてもらってきました。

札幌に赴任してから何かできるものがないかとホームページを検索し「うえるかむはうす」を知りました。そこで6月から会報作りやパソコン事務の方でお手伝いをさせていただいています。カトリック教会の信者ではありませんが、「うえるかむはうす」の活動に強く賛同し、微力ではありますが時間の都合がつく限り活動のお手伝いをさせてもらおうと思っています。よろしくお願ひします。

うえるかむはうす 石田 昌弘

私が国際デーを知ったのは一昨年、学校で「国際デー・ボランティア募集」の掲示を見たときでした。元々、異国の文化や食べ物に興味があったので、このイベントを通じてその雰囲気や料理を楽しむことが出来ればと思いボランティアに参加しました。始まる前までは漠然と様々な国の人と交流できることを楽しみに思っていたが、札幌にも様々な国の人々が住んでいること、また、このようなイベントに参加するために多くの人々が会場に足を運んでいることを実際に参加して感じ取ることができ、異文化交流がより身近なものに感じました。言葉、文化の壁を越え、人々が協力し、1つのイベントを作り上げていくことは、お互いの文化を知り、理解するきっかけとなる貴重な機会だと思ひます。このような機会を通して私自身もっと視野を広げていきたいと思うとともに、少しでも多くの人にとって異文化交流が身近なものになるといいなと思ひます。

天使大学4年 石田 春菜

第30回全道青年の集いin留萌 「気づき・築き・続き」

護美 (ゴミ) 全道 chance! chance!! chance!!!

実行委員長 一戸 信之

2007年9月22～24日に第30回全道青年の集いを地元の留萌で開催出来たことを心から感謝しております。2泊3日の中でみなさんと一緒に話し合いながら色々なことに気づき、それを形にして築きあげ今後もずっと続けてほしいという願いを込め、テーマ『気づき・築き・続き』にしました。



セッション2の海岸のゴミ拾いを通し目に見えるものや内面的なことに気づくことがあるのではないかと信じひたすら拾う作業を行いました。ゴミがたくさんある中ふと立ち止まりよく見るとそこには新たな小さな命がありました。神様はそこにも存在しているのです。

ホームレスの講話をしてくださった真鍋さんの言葉「私たちにはたくさんのすることがある。私たちは偽善ではなく心から本音で分かち合っているのか」この言葉を聞かされたように受け止め感じられるのでしょうか？自分は偽善なのではないか？ただ上辺だけの上手な話をしているだけではないのか？そう思ってしまいました。しかし真鍋さんの言葉を聞いたからこそ振り返るチャンスでもありました。真鍋さん気づかせてくれてありがとうございます。

最近青年の数が激減しているように感じられます。なぜなのでしょう？青年活動って何？それって意味あるの？同じことやってるだけじゃ？と知っているあなた！そこに愛はある

の？いつまで無視し続けるの？神様はいつもあなたに話しかけてるよみなさんに1番気づいてもらいたいのは神様のメッセージ「呼ばれている・導かれている」ということ。神様はすぐ鼻の先にいますよ。

神様がくれた愛(LOVEではない)はとてすばらしいもので永遠に不滅です。自分が何かの壁にぶち当たる時手を差し伸べるかのように救ってくれるものです。神様が作った人間には常にチャンスがあります。そのチャンスを生かせるかどうか。それにはたくさんの祈りと、実際の行動が伴わなくてはなりません。祈ることは大切であるがそれだけでは足りないのではないのでしょうか？外に出て周りを見ることも必要だと思います。

最後に一緒に全道青年の集いを準備してくれた実行委員のとし、たかひさ、本当にありがとう3人のひとりでも欠けていたらこの護美(ゴミ)全道はできなかったでしょう。参加してくれた青年のみんな、それを支えてくれた全ての人にも感謝の気持ちでいっぱいです。



私は少なくとも愛に気づいています。今回参加したみんなはこのすばらしい愛を気づいてくれたらうか…あれ!? 実は私の母も実行委員だったのかあ!?母の愛は涙ものです。神様すばらしいお恵みをありがとう。

今回、初めて全道青年の集いに参加しました。

留萌に着いた時には、もうセッションのゴミ拾いが始まっていて、途中からの参加でうまく馴染めるか不安でしたが、人数も少なく、ほとんど一度会ったことのある人たちだったので、すぐに馴染めることができてよかったです。

テーマ『気づき、築き、続き…』の青年の集いの主になるセッションは、ゴミ拾いから始まり、ゴミ拾いの分かち合いを含めたレク形式のセッション、留萌教会の掃除、真鍋さんと間野神父さまのホームレスの人たちの講和、青年ミサの発表準備を含めたこれまでのセッションの分かち合い、二度目のゴミ拾い、一日目と三日目の心境の変化についての分かち合い、青年ミサというように、参加する前に考えていたカト高のようにグループで輪になって話すことよりも、全体でいろんなことをすることのほうが多かったけれど、その少ない分かち合いのなかで、二日目最後の青年ミサ準備を含めた分かち合いがとても印象に残っています。

発表のテーマは、ゴミ拾いや講話を聞いて、今自分にできることは？というもので、自分はゴミ拾いをして感じたことは、ポイ捨てはよくないということに改めて気づいたことなどと安直に考えていましたが、ほかの人は、小さなことにも目を向けることは大切、気が付いたら実際に行動することも大切、やってみてわかることもあるのだから勇気を出して行動する、などなど、すごく大人な発言に驚きました。そして、話を深めていった結果、“たとえどんなに小さな感謝の一言でも、感謝することもされることもお互い次の活力になり、そのほかの人にもつながっていく”ということでもとまったとき、このテーマからこんな大切なことを気付けたことにすごく感動しました。

青年ミサでは、上杉神父さまがお説教のなかで言っていた、“人の作ったものは自然の美しさには敵わない”という言葉に、ゴミ拾いをしているとき見た夕陽のきれいさや、普段はゴミと同じように見える鳥の羽や干からびた海藻のことを思い出すと、これもまた気付きなのだと思いました。そして、三日間を振り返ってみて、小さなこと、些細なこと、すべてのことに『気づき、築き、続き…』が隠れているということに気づけたと思います。

最後に、この貴重な体験ができた集いを計画してくれた、のぶさん、としさん、つっちー、また、一緒に参加した皆さん、神父様、本当にありがとうございました。

円山教会 鈴木 達朗

「自分自身を知る」 青年ミサin函館

青年ミサとは、小教区教会の枠を超えて、青年たちが自然と集まれる場を目的とした集まりで中心はミサです。各教会の青年会や様々な場で活動している青年たちが互いに知り合い、キリストへの信仰と福音を生きる事を励まし合うようになればと期待して始めました。今までに月寒教会、旭川神居教会と行ってきています。

今回は函館との青年との交流をもっと深めたいと思い函館宮前町教会で開催することになりました。今回の参加者は全員で15名。宮前教会「オリーブの家」にて夕食のカレーを食べ、全員分かち合いを行いました。今回のテーマは「自分自身を知る」。資料をもとに「日常生活のなかで自分は人に流されていないか」「自分の価値観とは?」「生きる理由・死ぬ理由」について分かち合いを行いました。自分の価値観を考えていく中で、人とのつながり・出会い・人に必要とされていることが生きる理由となっているのではないかという話しもでき、よい時間を持つことができました。分かち合いのあと、宮前教会の聖堂にてミサをおこないました。地元の高校生も参加してくれ、みんなでミサをささげることができました。

次の日は宮前教会の信者さん達とともに聖歌隊に入れてもらい、ミサをささげました。

今回は11月10日に北広島教会にて青年ミサを企画しています。

今回、初めて会う人が多かったですが、参加者は10数人くらいの少人数で、その分参加者一人ひとりと話す機会ができたと思います。

分かち合いは少し時間が短くあっという間に終わってしまった感じではありましたが、『日々の生活で周りに流されて生きていないか』、『自分の価値観をもって、自分らしく生きているか』といったことなど、とても感慨深いテーマで、普段考えない自分の価値観は何か? 何のために生きているのか? など自分の中でいろいろなことを考え、それを分かち合えることができるととてもいい経験になりました。

分かち合いの後の青年ミサでは、ミサの途中今回の青年ミサを通じてひとりの人に何か内に思うことがあれば伝えにいき、直接ありがとうという気持ちを伝えることをしました。普段自分はあまり何も考えずミサに出てしまっている時が多いのですが、神様への感謝だけではなく、ここに出会った皆に感謝して祈りをささげることが大事なことでないかと感じる事ができました。普段のミサでも今回のミサのように身近に居る人に感謝の気持ちを持って望むべきなのだと思います。あと、とても印象にのこっていることは、食事担当のつっちい君の料理がとてもおいしかったこと。夕食はシーフードカレーであったが、カレーの他にもデザートは杏仁豆腐や、夜食に作ってくれたものがとてもおいしかった。さらに、つっちい君は朝一番で起きて自分が起きた時には朝食の準備もうできてありました。自分はえらいなと思いつつ、今回の分かち合いで話し合った内容で自分のしたいことをするべき時にしているということが当たり前のようにできているようで、自分も見習わなければと思いました。

今回の青年ミサは自分にとって普段いえないことを分かち合いの中で話せたり、自分らしさとは何かなどを考えることができたので参加して本当によかったと思っています。

最後に今回青年ミサを企画・進行してくれた方々と、一緒に参加した皆で青年ミサが行なわれたことに感謝したいです。

北広島教会 鈴木 博之



始まり... 1891年、教皇レオ13世は回勅「レールム・ノヴァールム」を発表しました。当時、ヨーロッパ社会は工業化が急速に進み、工場や鉱山で働く労働者たちの労働条件は大変悲惨でした。低賃金で長時間労働、職場環境は不衛生で危険さわまりないものでした。12～3歳の少年少女たちも、12時間以上このような職場で働かされ、夜勤までやらされるような状況でした。こうした状況に対して、回勅「レールム・ノヴァールム」は、労働者の権利と人間としての尊厳が守られなければならないことを強く訴えました。それは、カトリック教会が初めて労働者の社会問題を正面から取り上げたものとして注目され、教会内外に大きな影響を与えました。



JOCの誕生 1919年、ベルギーのレーケン教区司祭のカルデン神父は、働く若者たちが搾取され、人間としての尊厳を奪われ、経済発展のために使い捨てにされている現実を目の当たりにしてきました。カルデン神父は、数人の働く若者たちと一緒にJOC（若者の養成運動）を設立しました。「一人の働く若者は全世界の金銀よりも無限の価値がある」という信念のもとに、働く若者たちが人間として目覚め、互いに養成し合い、それを通して社会を変えていくJOC運動を始めたのです。

JOCはベルギーからヨーロッパ全体、やがてアメリカ大陸、アフリカ大陸、そしてアジアへと広がりました。そしてキリスト教国以外の国々では、カトリック信者ではない多くの若者たちがこの運動に参加するようになりました。

日本JOCの出現 日本では敗戦後間もない1949年、北九州の小倉教会でムルグ神父（パリ外国宣教会）と数名の若者たちによってスタートしました。そのうわさはたちまち全国に広がりました。間もなく、北海道砂川の神父から、JOCを作りたいので来てほしいとの要請がありました。ムルグ神父は、北九州から北海道まで何度も旅をし、後に、私の人生の半分は汽車の中だったと語っています。

JOCの養成方法 JOCは若者たちの共同体です。キリスト者が否かを問わず働く若者たち、またこれ

から働く学生たちが、共に生きる仲間として互いを認め、グループでの定期的な集まりや日々の活動を通して、人を信頼することを学び、自らを養成する場です。定期的な集まりでは、活動のプランを立て、それがどのように進展したのかを話し合います。評価はJOCが昔から使ってきた「見る・判断・実行」という方法を使います。それを「生活と活動の見直し」と呼んでいます。「見直し」では一人一人の日々の生活に光をあて、各自の置かれている現状をより深く理解するため、様々な角度、視点から考えていきます。また、その人にとってベストな状態とは何か、そのために何ができるかを考えます。具体的に自分（自分たち）に何ができるかを決め計画を立てていきます。

「見直し」はたいてい個人的な話題から始まりませんが、見直しが進むにつれ、それは社会や時には世界とも深くつながっていることを見ることが出来ます。

日本JOCの取り組み さて、多くの青年運動と同じように、JOCも90年代に弱体化し、これまで途切れることのなかった日本JOCの事務局で働く専従者が選出できなくなりました。国内レベルでの協力体制が弱まりましたが、ねばり強く頑張ってきたグループのリーダーたちと、運動の協力者たち（OBや司祭、修道者たち）の協力により、運動の火は消えることはありませんでした。そしてこの3～4年で徐々に再生し、全国的協力体制を復活させるため、各地域の代表者たちによるプロジェクトチームが組織されるようになりました。



全国JOCデーin札幌

今年9/15～17、札幌働く人の家と月寒教会を会場に、「全国JOCデーin札幌」が開催されました。札幌、大阪、京都、岡山、広島の働く青年たち、そしてアジア太平洋地域のJOC書記局員（インドネシアJOC出身）が参加し、総勢30名ほどになりました。

JOCの名称 : JOCはフランス語のJeunesse Ouvrière Chrétienne（キリスト者の青年労働者運動）の頭文字からきたものです。英語圏ではYCW（Young Christian Workers）、スペイン語圏ではJOC（ホック）、ドイツ語圏ではCAJ、フラマン語ではKAJです。

日本では長い間「ジョック」または「カトリック青年労働者連盟」と呼ばれていました。しかし近年、事務やサービス業で働く人が増えたことに伴い、「労働者」という言葉が一般的に使われなくなりつつあります。また「カトリック青年労働者連盟」という名称そのものが堅苦しいイメージを与えるものとして若者の間で受け入れられず、「JOC(ジョック)」という名称を使うことが多くなりました。

テーマは「生きるためには～How much?～」。18歳～30代前半の働く若者のライフスタイルと生活費、そして収入について、まず各個人の具体的な現状を分かち合い、互いの状況を理解し合うことから始めました。

見る&判断 札幌から、新卒者以外はまだまだ正社員としての就職が難しい状況が報告される中、岡山ではより良い条件を求めて転職をする人もいと報告されるなど、地域による状況の違いが見られたり、一般的に報告されているデータと現実社会での実感にズレが生じている場合があることが紹介されました。

また各地域で調査してきた一人暮らしにおける収支バランスの報告を見ると、多くの非正規雇用は、よほど切り詰めないと一人暮らしが困難



な経済状況にあることが共通の現状として見られました。日々の生活はできても、将来のことを考える余裕がなく、夢の実現や結婚など明確な目標を持つ人の中には、複数の仕事を掛け持ちするケースもありました。しかし非正規雇用は、多くの場合何の保障も受けず働いているケースが多く、雇用者側の都合や、病気などでいつ失職するかわからないという恐怖と背中合わせの状況です。非正規雇用であっても受けられる社会保障について充分に知る必要性もみられました。

その他ある職種では、各地域共通して労働内容が正当に評価されているとは思えない低賃金が見られ、社会的な構造の問題に言及する発言もありました。

実行 十分な話し合いの後、各自の個人的な改善点と、JOC運動として、地域の活動や全国規模で今後取り組む必要のあることを考えました。

提案された内容は以下の通りです。

- 不安定雇用など若者を取巻く状況に対して、さらに広く自分たちの周りの若者の現状や考えを聞き、集める。
- 社会保障など、正規雇用、非正規雇用のメリット、デメリットについて共に考えていく。
- 業種別の賃金格差を是正してもらえるように社会的な活動に参加していく。
- 実践可能な無駄のない収支のやりくりを考えていくため、みんなとアイデアを分かち合う。

■経済が上向きというが現実はどうか？地域、業種ごとに異なる実態を全国規模で調べてみる。

これらのプランは、各地域のJOCグループや日本JOCの活動計画を話し合う際、再度検討して、具体的な取り組みとして実行していくことになります。

全国JOCデーは、初日悪天候に見舞われ、一部プラン変更を余儀なくされましたが、全国の仲間の協力を得て、和やかで実り多い体験となりました。

(詳細は「ガリラヤ通信」「JOCだより」をご覧ください)

札幌JOCの日常 さて、札幌JOCは、毎週水曜日に集まります。若者であれば誰でも参加できます。早めに来るメンバーが夕食を準備し、7:30ころから皆で食事をとることにしています。一食200円。これが働く人の家での私たちの食費です。一人暮らしの青年が半数以上を占めるため、経費をおさえることを意識しつつも、工夫しながら、きちんとしたものを用意しています。不慣れな包丁さばきで料理する人と、それを指導する手馴れた料理人がいて、食事作りは結構賑やか。それ自体がイベントのようなときもあります。ともにテーブルを囲んで食事をとること。私たちにとってみんなで囲む食卓は楽しみのひとつです。

集まりは8:30～10:30の約2時間。司会者の合図で始まります。「生活と活動の見直し」のほか、グループとしてのプランを立てたり、評価したりします。メンバーが揃うのは9:00を過ぎるころです。帰りの遅いメンバーは集まりの後、10:30以降に夕食をとることになります。

ほとんどが非正規雇用、サービス業で働く札幌JOCでは、メンバーの勤務時間はまちまち。交替勤務で働く者もいて、全員が揃うことはめったにありません。そのような状況でいかにコミュニケーションを図るか...は、繰り返し議論となることです。



◎札幌JOCについての問合せは「札幌働く人の家」まで
Tel/Fax: 011-859-2567 住所: 月寒教会敷地内
JOC協力者 鳥居明子

働く青年たちの夢は? JOCが正式に国際組織となって今年50周年。記念に青年たちの夢を紹介しています。

- ◆労働者の権利が守られること。自分の店を持ち働く若者たちに仕事に就くチャンスを与えることです。(Rohitha 22歳 スリランカ)
- ◆紡績工場で1年間働いています。もっと高い教育を受け、良い仕事に就きたいと思っています。(Kiran Arif 21歳 パキスタン)
- ◆ベディキャブ(サイドカー付き自転車)のドライバーです。夢は非正規雇用でも社会保障を受けられることです。(Ricky 27歳 フィリピン)
- ◆私は登録労働者として6つの職場で働いています。夢は劇場のマネージャーです。(Bridget 23歳 オーストラリア)
- ◆派遣社員の事務員をしています。月給147,000円ほどです。夢は知らない場所に旅行をすることです。(Hiroko 24歳 日本滋賀)

守護の天使

…カトリック北一条教会をご紹介します…

はじめに

札幌における福音宣教を担ってから、北一条教会は今年で126年のあゆみ、現在の聖堂も献堂から91年目を迎えます。この間、北一条教会の主任司祭は12人、台帳によると受洗者3,430人、堅信者1,820人、この教会で結婚したカップルは1,280組、旅立たれて逝かれた方は980人となっており、その折々の祈りが聖堂に染みこんでいます。

現在、この北一条教会をよりどころに信仰生活をおくっている私たち約650人は、久保寺緑郎主任司祭、中江、井戸井両神父とともに、諸先輩から受け継いだ信仰の恵みをあらたに感謝し、今の世の中において信仰の証し人となるあゆみを続けているのです。



フラット床(パイプオルガンと改修が終わった聖堂床)



家庭集会の一コマ

北一条教会はこの夏、教会内外の皆様のご支援を受け、パイプオルガンを設置し、聖堂など司祭館を除く教会施設のほとんどを外靴のまま利用できるようになりました。

2003年10月に信徒の活動の拠点「カテドラルホール」の完成以来、新たな共同体づくりに取り組んできた北一条教会を紹介させていただきます。

*洗礼等の数は直近の台帳上の数字であり、欠番などで多少違いがあります。

教会のあゆみ

- 1881年 札幌の信徒・大國元助宅で最初の布教
- 1916年 現聖堂建立、それまでの石造建物を司祭館とする
- 1966年 信友会会則がつくられる
- 1981年 宣教100周年記念式典
- 1995年 信友会会則大改正 世話人会制度発足
- 2003年 石造司祭館の内部をカテドラルホールに改築
- 2004年 教会会計と信友会会計が一元化される
- 2005年 信友会廃止 新教会規約決定 運営委員会制度発足
- 2007年 パイプオルガン設置 聖堂等改修工事

どういう教会共同体をめざしているのか

北一条教会の規約は、前文と16条からなっています。この規約の特徴は前文を設けたことです。一人一人が北一条教会に所属する信徒として、共同体に

参加する意識づけが大切ということで、新たな共同体づくりの検討の中で文章化されたものです。

前文は、まず諸先輩の輝かしい活動の伝統を讃え、教会はまた隣接する聖園幼稚園、ボーイスカウト26団などと連携をしながら育まれてきたこと、さらに求道者や地域の人々にも開かれた教会をつくりたいことを強調しています。その上で、北一条教会は、司祭と信徒が一致して「祈り、分かち合い、学び合い、支え合い」を大切にした宣教共同体づくりをめざす、こんな共同体を望んでいます。

どういう共同体活動を始めたのか

○運営委員会による教会全体の運営の円滑化を行っています。

毎月最終日曜日に、主任司祭、運営委員長、副委員長（男女各1人）、各部代表、各会代表、地区集会世話人等により、翌月の行事確認・調整、活動の協議が行われています。

○毎月、地区集会を開催しています。

地域における信徒の交わりを深めるため「地区集会」あり、毎月第1日曜日に教会内で集会が行われています。輪番制として2ヶ月ごとに当番（行事の食事用意、結婚式・葬儀のお手伝い）地区の仕事をこなし、集会ではその日の福音・説教の分かち合い、随時に病人の訪問や典礼奉仕が行われています。

○部や会について

総務部

（総務グループ）

- ・教会の庶務、渉外、慶弔、信徒の転出入、その他他の部に属さない事項
- ・教会運営委員会の庶務に関する事項
- ・地区集会に関すること

（財政グループ）

- ・教会財政に関する事項

典礼部

- ・ミサ等典礼奉仕、典礼奉仕者の養成、典礼の研究、聖歌隊
- ・その他典礼に関わる事項

広報部

- ・かてどらるの鐘編集
- ・カトリック新聞等の普及、幹旋
- ・教会ホームページの管理（調整中）

福祉部

- ・福祉活動全般
- ・バザーに関すること（実行委員会体制）

宣教・養成部

- ・黙想会、研修会、信徒の信仰育成、巡礼の旅等
- ・具体的な宣教活動に関すること

施設・営繕部

- ・教会施設の維持、管理、修理、備品
- ・教会敷地の整備
- ・おそうじの会

オルガン委員会

- ・オルガンの適切な維持管理に関すること
- ・対外的な渉外窓口による調整

教会学校・高齢者一六会・青年会、中高生会（実態なし）

この2年間の共同体活動を振り返ってみて

北一条教会は司祭と信徒が一致して「祈り、分かち合い、学び合い、支え合い」を大切にしたい共同体づくりをめざすことを規約前文で宣言しました。これらは共同体の本質的な要素といわれるものですが、この視点からこの2年間を振り返り、変って

きたことや課題などを考えてみます。

祈り

特に、2005年の「聖体の年」には初金曜日のタミサ後にご聖体を顕示して祈ったり、その年の夏には福祉部の呼びかけで、毎日時刻を決めて、病人の方の回復のための祈りが始まりました。今年2月には殉教者の残したメッセージを深めようと「殉教者を想いともに祈る」取組みが一週間にわたり行いました。

分かち合い

分かち合いは神について、また自分の人生の体験について自由に語ることで、今、どこの教会でも行われています。北一条教会では、地域における信徒の結びつきを深めようと「地区集会」が規約に位置づけられ、毎月の集会の中でその日の福音や説教を基に分かち合いが行われています。馴れないという声もありますが、このことを通して新たな気づきや信仰の喜びが増したとの声も多く聞かれます。

学び合い

教会学校は子供が少なく苦勞しており、教会全体としてもまだまだ努力が必要です。しかし、地区集会を通じて「聖書を学びたい」という声が上ががり、毎月第2、4水曜日午後1時半から聖書を学ぶ会が始まりました。また、四旬節の助けとして「パッション」や巡礼の旅を理解するため「塩狩峠」などの上映会を行ってきました。

支え合い

悲惨な事件が相次ぎ、自己中心的になっている社会にあって、私たちは神への信仰を分かち合う仲間からの支えと励ましを必要としています。特に高齢化が進む教会共同体にあって高齢者同志が励まし合う「高齢者一六会」の活躍は素晴らしいものです。教会の地区集会の誕生のいきさつはこの視点（地域で支え合う）からの議論が始りでした。多くの方に地区集会に参加してほしい、参加することによりまず知り合うこと…毎月こんな声が届きます。

まとめとして

共同体づくりはどの教会でも大きな課題となっています。この2年間の共同体の「祈り、分かち合い、学び合い、支え合い」の歩みは、地域との連携をより作ろうとチャリティバザーが「かてどらる祭」として生まれかわり、夏にはNPOが呼びかける「カルチャーナイト」に参加し、教会施設が開放され、地区集会では病人訪問の機会が作られました。しかし、残念ながら若い世代の姿が少ないのは多くの教会と同じ状況です。北一条教会の歩みはまだ蟻の一步ですが、福音宣教への歩みの一步でもあります。

家庭部会 講演交流会Ⅱ「うつ病って、心の病気ですか？」

講師 ポロナイクリニック 高塚直裕 先生

11月10日（土）午後2時より、円山教会にて家庭部会主催による講演交流会を開催いたしました。70名の参加でした。今回の講演では質問される方が多く、うつ病が身近で深刻な問題であることが、うかがえました。高塚先生は質問のひとつひとつに丁寧に答えてくださいました。質問の中で一番多かったのが「周囲はどのように接したら良いのか」と言うこと。「何が出来るか」と言うことでした。

高塚先生からのアドバイス…

まず、うつ病のメカニズムをよく理解すること。講演などで得た知識を本人に伝えることも大切。病気という事実を伝えることで、自ら病院に行って治そうというきっかけになるときもある。あとは「とにかく、だまってそばに居てあげること」。ほって置くのではなく「つらいことを理解している人がそばに居る、心配している人がここに居るよ」ということが伝われば良い。そして、祈ること!!（ガンの生存率が祈ってもらっている人のほうが、祈ってもらっていない人よりも高い、というデータがアメリカで出されたそうです。）



エミール神父様より

私たちは遠藤周作の描いたイエズス様のように静かに祈りながら、ただそばに寄りそう。そうありましょう。祈りはすごいエネルギーです。祈りで応援しましょう。先生とクリニックの方々のためにも祈り続けましょう。



講演後、温かいお茶と、家庭部会の宮井さん手作りのコンポートを頂きながら、先生を囲み、しばし交流のときを持ちました。有意義な講演会になりましたことを、神に感謝いたします。

家庭部会 山崎美智子

【うつ病】

- * **有病率** 15人にひとり（女性：男性 2：1）
- * **発症のメカニズム** モノアミン（ノルアドレナリン、セロトニン）神経系機能異常
（仮説）ストレス適応機能不全。生体リズム異常。前頭葉、海馬、大脳基底核の萎縮。前頭前野の血流低下。
- * **症状** 脳の機能全体にブレーキがかかっている状態。
精神症状：気分の落ち込み。意欲の低下。あせり・罪悪感。思考力の低下。不眠。日内変動（朝から午前中が不調で、午後から夜にかけて軽快する。）
身体症状：疲労・倦怠感、頭痛・頭重感、めまい、吐き気、口渇、便秘・下痢など。仮面うつ病（身体症状が前面に出て、うつ病が背景に隠れている。）
- * **うつ病になりやすい性格** 責任感・正義感が強い、几帳面、誠実、熱心、まじめ
周囲にあわせる。物事にこだわる。融通が利かない。
「自分は怠け者で、皆に迷惑をかけている。」（自責の念）
- * **どうしたら良いか？**
①「怠け」ではなく、他の身体の病気と同じ「脳の病気、脳の機能低下」である。 ②休養とクスリで2～3ヶ月で良くなる。（薬を飲まないでも済む、ことではない。） ③「悪あがき」をせず、ゆっくり休む。 ④良くなるまで重大な決定はしない。 ⑤「生きのびる」
- * **まとめ** うつはエネルギーの不足と考える。
エネルギーを溜める器の修理と補給、その無駄使いを止める。

♪ 次回の講演交流会 2月3日（日）午後2時～ 北11条教会 テーマ「ご存知ですか？依存症」

編集後記

美しかった紅葉も落ち葉になり、寒さも本格的になってきました。待降節を迎え、「主を待ち望む」「主をお迎えする」という言葉を意識しながら、本当は待ちくたびれるほどに私たちを待っているのは御父のほうなのだなあ…と感じます。私たちが幼子のように主に駆け寄る姿でありますように。

(M・T)